

(福祉) 愛宕小学校 5年

## 愛宕HAPPYプロジェクト

5月～2月(55時間)

### 1 ねらい

- ・福祉実践教室や附属養護学校との交流から、福祉に関わる課題を見つけ、見通しを持って追究することができる。
- ・追究してきたことをもとに、自分が感じたことや意見をまとめ、友達や周りの人に分かりやすく伝えることができる。
- ・福祉に関わる課題を追究したり、障がいのある人と交流したりする活動を通して、自分と人・社会との関わり方を見直したり、自分にできることを実行しようとしたりすることができる。

### 2 実践の概要

5月	福祉ってなんだろう。	<ul style="list-style-type: none"><li>・福祉とは何かを考える。</li><li>・図書やインターネットで福祉について調べる。</li></ul>
6月	附属養護学校の子と友達になろう。	<ul style="list-style-type: none"><li>・附属養護学校の友達とどんな交流をしたいか考える。</li><li>・附属養護学校の子とペアを組んで、交流を楽しむ。</li></ul>
7月	追究のテーマを決めよう。	<ul style="list-style-type: none"><li>・附属養護学校の子との交流を通して感じたことから、追究のテーマを決める。</li></ul>
10月	車椅子体験をしよう。	<ul style="list-style-type: none"><li>・体が不自由な人が、車椅子に乗るといったことがどういうことか、実際に体験してみる。</li><li>・車椅子に乗っている人をどのように介助したらよいか考える。</li></ul>
	アイマスクを体験しよう。	<ul style="list-style-type: none"><li>・目が見えないことってどういうことか、実際に体験してみる。</li><li>・視覚障がいガイドの体験をする。</li><li>・盲導犬ユーザーの方のお話を聞き、ガイドを体験する。</li><li>・目の見えない人をどのように介助したらよいか考える。</li></ul>
11月	体験のまとめをしよう。	<ul style="list-style-type: none"><li>・障がいのある人にとってどんな町が暮らしやすいのか考える。</li></ul>

#### (1) 附属養護学校との交流

毎年、5年生は附属養護学校の小学部の子たちと交流している。附属養護学校は、本校の近くにあるが、普段の生活の中では、会ったり一緒に遊んだりすることはない。近くにあることや、毎年5年生の子たちが交流していることも知っているが、どんな子たちでどう接したらいいのか、分からないことがたくさんあった。そこでまず、交流の第1回目は自己紹介をし、1年間交流していくペアを決

めて、その子と一緒に遊ぶ時間をとった。遊ぶと言っても附属養護学校の子たちがする遊びに寄り添って一緒に時間を過ごすことになる。附属養護学校の子1人に対して、2人～3人の子がつく形になるのだが、話しかけてもなかなかコミュニケーションが取れない。しかし、一緒に時間を過ごす中で、附属養護学校の子の様子を見たり、いろいろな遊び道具を見せて遊びに誘ったり、養護学校の先生に聞いたりしながら子供たちは、お互いに笑顔が出るようになるくらい楽しくふれあうことができた。(写真①)



写真①

## (2) 福祉実践教室での体験

附属養護学校の子たちと交流した子供たちは、「障がい」に関心を持つようになった。「目が見えないということはどういうことなんだろう」「車椅子に乗ってれば自由にいろいろな所に行けるのかな」「盲導犬や介助犬はどんな訓練を受けているのかな」など、子供たちは、様々な思いを持つようになったため、ボランティアセンターを通じて福祉実践教室をお願いすることにした。

まず、車椅子体験では、体育館にマット（段差）を敷き、そこを車椅子に乗って移動する。自分で車椅子を動かすだけでなく、友達が乗っている車椅子の介助も体験した。(写真②)

さらに、アイマスクをつけて体育館の中を歩くことで暗闇の怖さを知り、友達をガイドすることで、ガイドの難しさとガイドしてもらった安心感を感じることができた。(写真③)

体験を終えた子供たちが一番強く感じたことは、「声かけ」の大切さであった。「暗くて怖い所や段差を歩いても、友達に優しく声をかけてもらえると怖くなくなった。」これが子供たちの感想であった。



写真②



写真③ 資料①

この体験により、「自分たちにまずできるのは声をかけることだから、これから勇気を持って声をかけたい」という思いが子供の中に生まれた。

### 3 実践を振り返って

自分たちは、目も見えるし耳も聞こえる。そして体も自由に動かすことができる。でも、少し視野を広げて見てみると 体の不自由な人のためにいろいろなところに工夫がされている。また、この実践を通して子供たちは、体が不自由な人たちもわたしたちと同じようにいろいろなことに挑戦したり、夢を持って生活したりしていることを知ることができた。(資料①)

障がいのある人と交流を持つことで、今までは身近に感じるができなかったことを考える機会になったと思う。このことが、施設面の「バリアフリー」だけでなく、心の「バリアフリー」につながればと願っている。

**愛宕HAPPYプロジェクト**

福祉実践教室 15/19 NO.1

「車いす」を体験して	車いすについてわかったこと
目をつぶっておしてもらったら上がる時、下がる時、段差の時などは、こわい。たまたま、言葉をかけてもらっていいか、たまたま、こわい、たまたま、おどろきました。三角コーンをくねくねまがる時、こまがぶすかいたです。人でやるより、ずいぶんたまたま	上がる時、下がる時、たまたまの時、必ず「上げるよ」「下げるよ」などと声をかけるということです。乗っている人は、いきなりられるとびっくりしてしまいます。

(大尾 和也) さん・(村松 悠) さんと出会って

心に残った話や感じたことを書いておこう

私は、起きたりするときに普通に起きあっているけど、車いすの人は起きたら車いす、復る時は車いすから下りるみたいで、大人なことがあると聞いて、障害者は毎日とても大人なんだなあと感じました。車いすでも車転でできるねんて、とてもいいと思いました。

★読んで考えたり活動できま